



令和6年度 長崎市立三重中学校

令和 6 年 8 月 9 日

学校だより

わくわくする学校

文責

合言葉「考えて行動する」

長崎市立三重中学校

<http://www.nagasaki-city.ed.jp/mie-j/>

校長 田添 俊和

平和について考える 8月9日（金）平和集会を行いました

1945年8月9日午前11時2分、アメリカ軍が投下した1発の原子爆弾によって長崎では、人々が生きたまま熱線に焼かれ、爆風に潰され、7万4千人の命が奪われました。

長崎市の鈴木史朗市長は、先月、2026年の核拡散防止条約（NPT）再検討会議に向けた準備委員会で、

「原子爆弾による死亡者は、長崎、広島両市を合わせて21万人にも上ると推定される。女性や子供、お年寄りなど一般市民の命や生活が、原爆によって無差別に奪われ、辛うじて生き延びた被爆者も、数年後、数十年後に白血病やガンなどの発症や、後遺症により苦しみや不安を今なお抱えている。

核兵器は、人間が人間らしく生きる尊厳を容赦なく奪い去る残酷な兵器である。

被爆から79年。ロシアのウクライナ侵攻や中東での武力衝突が続く中、ますます核兵器への依存が強まり、核軍拡競争が加速し、世界はより危険な状態へと突き進んでいるのではないだろうか。一度核戦争が起こると、人類存亡の危機に瀕する。核兵器は絶対に使ってはならない。人類が核兵器のリスクから逃れるための唯一の手段は『廃絶』しかないのだ」と強い危機感のもと、核兵器国をはじめとした各国に訴えました。

また、被爆者の山田一美さんは、「広報ながさき8月号」で、「現在の世界情勢は戦争前の日本と驚くほど似ていて、戦争が再び始まるのではないかという危機感がある。『戦争放棄、核兵器廃絶』のメッセージを引き続き届けたい。私にとって戦争がないだけで平和だ。戦時中は我慢の連続で思い通りの生活をする事ができなかった。今の時代は、思うことを自由に表現することができる。何をしてもよく、何を言ってもよい、そんな現代の子供たちは恵まれていてうらやましく思う。みんな一人ひとりに特徴があって長所があると思う。自分にしかできないことに、核廃絶の思いをもって取り組んでほしい」と述べておられます。

山田さんは、現在、小中学生や修学旅行生のもとに出向いて、自身の体験について話す活動をしています。2017年にはドイツを訪れ、現地の学生に被爆体験講話を実施。今年で91歳。身体がきついつきもあるが、可能な限り活動を続け、声を届けたいとも語っています。

全国の被爆者は現在10万6825人、平均年齢は85歳を超えました。被爆者の方々は高齢化し、年々減少しており、被爆者の声をどう後世に伝えていくかが課題になっています。やがて「被爆者のいない時代」が必ずやってきます。その思いを受け継ぐのは誰でしょうか。それを語り継いでいくのは、長崎に生まれ育った私たちなのです。私たちは原爆の事実を世界中の人に発信していかなければならない。後世に伝えていかなければならない。それは長崎で生まれ育った私たちの使命です。

人々の強い決意と行動は、必ず世界の指導者たちの心を動かすことができます。

高校生平和大使の合言葉「微力だけど無力じゃない」。平和を求める私たち一人ひとりが胸に刻み、「平和の文化」をつくる活動に挑戦していきましょう。

県中総体・県吹奏楽コンクール

各競技に参加した選手のみなさん、本当にお疲れさまでした。また、暑い中応援していただいた保護者のみなさま、応援ありがとうございました。大会結果は、本校ホームページに掲載していますのでご覧ください。 <http://www.nagasaki-city.ed.jp/mie-j/>

【お知らせ】7月下旬に予定していた「中国福州市第十九中学校との交流」は、中国に台風が接近した影響で延期になりました。日程が決まり次第、お知らせします。